



## 東京の古本屋

橋本倫史著（本の雑誌社・2200円）

古本屋に流れる時間を記録しよう  
と著者は、2019年12月から10軒  
の本屋を訪ねて仕事を共にした。間  
に中断を挟み、21年7月の五輪開会  
式当日をもって記録は終わる。「本  
が見得を切」れるように棚を毎日並  
べ替え、古書交換会では入札者の手  
許を見つめない等、内側から描かれ  
るプロの手際に興味は尽きない。

本屋の時間を描いたはずの本書  
は、気がつけば、不要不急か否かで  
世の仕事が分類されてしまったコロ  
ナ下の東京の見事な定点観測となっ  
ていた。カミユは『ペスト』で「い  
かに働き、いかに愛し、いかに死ん  
だのか」を書いたが、著者は本屋が  
「いかに働き、いかに本を愛し、い  
かに生きているのか」を描いた。

古本で読む意味は何だろう。永井  
荷風の『澤東綺譚』を新刊の文庫で  
読むか、1937年刊の岩波書店版  
で読むのか。作家の生きた時空を共  
有できる判型で読めば、作家にとっ  
て未来にあたる今という時空を何や  
ら深く理解できそうにも思える。最  
後に本書に登場する本屋の名をば。  
古書 往来座、盛林堂書房、丸三文  
庫、BOOKS青いカバ、古書ビビ  
ビ、岡島書店、コクテイル書房、北  
澤書店、古書みすみ、古本トロワ。全  
店踏破を。（加藤陽子・歴史学者）

